

平成 21 年 6 月 20 日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2006～2008

課題番号：18320033

研究課題名（和文）江戸時代における〈書画情報〉の総合的研究Ⅱ
——『古画備考』を中心に——研究課題名（英文）Comprehensive Research on the Information about Paintings and
Calligraphy in the Edo Period Part2: Concentrating on *Kogabiko*
(Notes on Old Paintings)

研究代表者

玉蟲 敏子 (Tamamushi Satoko)

武蔵野美術大学・造形学部・教授

研究成果の概要：朝岡興禎編『古画備考』原本(1850—51 年成立、東京藝術大学附属図書館)に集成された書画に関する視覚・文字情報の分析によって初めて、自身の見聞や親しい人脈から提供された第一次情報に基づく出身の江戸狩野家、同時代の関東や江戸の諸派は詳細である一方、上方については一部の出版物に頼り、浮世絵も最新の成果が盛り込まれていないなどの偏向性が確認され、朝岡の鷹揚なアカデミズムの視点から、近代における美術史学成立直前の都市・江戸で開花した書画趣味の実態、価値観、情報の伝達経路を浮上させることに成功した。

交付額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|------------|-----------|------------|
| 2006年度 | 5,700,000 | 1,710,000 | 7,410,000 |
| 2007年度 | 3,700,000 | 1,110,000 | 4,810,000 |
| 2008年度 | 4,400,000 | 1,320,000 | 5,720,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 13,800,000 | 4,140,000 | 17,940,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史

キーワード：近世文化史

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究は、平成 15 年度—17 年度科学研究費補助金基盤研究（B）「江戸時代における〈書画情報〉の総合的研究——『古画備考』を中心に——」（報告書は〔その他〕ホームページを参照のこと）の第二期に位置づけられる。

(2) 1990 年代、日本の美術史学は学としての成立過程・叙述の枠組みなどを総点検する修正の時代に入ったが、近代美術史家の問題提起から始まったため、重要な諸点が見過ごされていた。

(3) 本研究はその不備を江戸時代以前の日本および東アジア美術史の立場から批判し、江戸末期に現れた幕府御用絵師狩野伊川院の子息で晴川院

の弟の朝岡興禎が編纂した『古画備考』の原本（東京藝術大学附属図書館）を歴大な書画情報を整理するための基地と見做し、第一期に整備した全巻の活字データのワード入力、原本のデジタル画像撮影などのインフラをもって第二期に臨んだ。

2. 研究の目的

(1) 原本と刊本・刊本の底本（「図書寮印」本、東京国立博物館）の校合を完了する。

(2) 言及される視覚資料・文献資料の現所在を確認し、調査を継続する。

(3) 『古画備考』の詳細な研究に留めず、近代以前の書画をめぐる言説・価値体系を再確認し、近世諸分野に対し開かれた学術資料を提供する。

(4) 最終目標を、古代より営々と積み重ねられてきた〈人間と書画の営み〉の解明に定める。

3. 研究の方法

(1) 研究代表者1名、分担者5名、協力者6名から成る研究会を組織し、分担によって進める。

(2) 原本と刊本・刊本の底本(「図書寮印」本、東京国立博物館)の校合を十全に行うため、比較資料の環境を共通するデジタル画像に整える。

(3) 校合作業は大学院生を中心とする研究補助者を適宜雇用してあたる。

(4) 美術史の立場から未開拓の備忘録・過眼録・鑑賞記録・考証随筆類など手稿資料に取り組む。

(5) 19世紀後半からの日本美術の海外流出によって国外から散逸している可能性の高い『古画備考』の言及作品・文献資料について現時点での海外情報の探索を行なう。

4. 研究成果

(1) 3年間の研究活動と成果

①第1年次(平成18年度):定例合同研究会2回(うち一回はシンポジウム)、シンポジウム「狩野家絵師の多様な仕事」の開催(於武蔵野美術大学、平成18年10月21日、発表のプログラムは[その他]ホームページを参照のこと)、定例合同見学会2回(池上本門寺、都内古美術商調査)、臨時見学会1回(都内古美術商調査)、図書寮印本(東京国立博物館)のカラーマイクロフィルム撮影の実施。

②第2年次(平成19年度)
定例合同研究会2回(うち一回は美術史学会東支部例会に研究代表者が発表参加、[学会発表①])、定例合同見学会2回(昭和の『古画備考』田中一松メモの調査)、臨時見学会1回(都内古美術商調査)、図書寮印本のカラーマイクロフィルムから作業用デジタル画像へ変換の実施

③第3年次(平成20年度)
定例合同研究会2回、臨時研究会1回(校合作業の調整・統合に関する討議)、定例合同見学会2回(徳島市立徳島城博物館にて中山養福写生図巻等の調査など)、デジタル画像、ワード入力データを駆使した原本、活字本、図書寮印本の校合の完成(出版物として刊行予定)、『古画備考』原本引用書画・資料一覧(未定稿)の改訂([その他]ホームページを参照のこと)。

(2) 研究メンバーの分担分野における主な成果と新発見

①玉蟲敏子(分担巻:巻1帝室、巻2廷臣1、巻3廷臣2、巻34住吉家、巻35光悦流、巻47倭絵名目)

1.『古画備考』執筆当時の朝岡興禎邸位置の確認

田島達也氏の紹介により実施した調査で徳島市立徳島城博物館蔵、中山養福画「魚草木写生図巻」(紙本著色、1巻)に中山が番町の朝岡邸を訪問

した際に執筆した「乙女椿折枝図」(29.5cm×41.4cm、下図)、「隣家の桜図」(29.5cm×18.8cm、40.3cm、19.8cm)、「乙女椿全図」(29.5cm×40.4cm)の3図が見出され、注記によって以下が判明した。

・天保5年3月13日朝から夜にかけて中山養福は番町の朝岡興禎邸を訪問した。

・3月13日の朝に朝岡邸内の乙女椿の全図を描き、また塀越しに隣家の山桜を描いた。

・3月13日の夜には、朝に全図を描いた乙女椿の原寸大とおぼしい折枝の精密な写生を行った。

朝岡と中山の親密な交際が伺われるのはむろん、当時の絵師の家にも、近代の日本画家と同様に画材に用いる植物が植えられていたことが判明し、



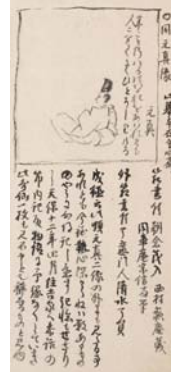
江戸時代の写生図巻の成立背景を知る上でも貴重な資料となる。成澤勝嗣氏の提供する朝岡没

年頃の安政3年(1856)の番町の地図によれば(⑨の成澤報告参照)、善国寺谷通と法眼坂通りに挟まれた裏六番町通の南側に「朝岡三次郎」とあり、三次郎は朝岡の通称なので、この位置に朝岡邸が在ったとみてほぼ間違いない。付近一帯は御家人や旗本ら幕府官僚の屋敷の連なるお堅い環境であるが、今回の調査で、『古画備考』の執筆された場が、絵師の間で乙女椿をめぐるささやかな交流が展開する文雅な環境でもあったことが判明したのは収穫である。

2.『古画備考』の構成と巻1の言及作品の問題

次に分担箇所の新発見として口頭発表([学会発表]①)した巻1について略述する。なお、巻35は第一期報告書で執筆し、その一部を[図書]②で一般に公表した。巻2、巻3、巻34、巻47の知見については解題の特記事項に譲る([その他]ホームページ参照)。

『古画備考』は、巻1~12階級および社会的な存在形態による分類、巻13~28通時的な名画観、巻29~30下近世、巻31~35大和絵系諸家・流、巻36~44狩野家、巻45~48集団制作・倭絵・難読の印章・巻物・画像という構成で、最初に掲載される



画像は、後鳥羽院宸画「三十六歌仙」の「源順図」と「元真図」(左図)である。書き込みから、「元真図」は西村藐庵が原本を所持し、朝岡の兄の狩野晴川院が模写していたのが分かる。「元真



図」は東京国立博物館に現存する。後鳥羽院

宸画「元真図」を巻頭におく構成は、「和漢流書画巻」(米国・ボストン美術館)の晴川院筆「和画卷」にも見られ(下図)、これも天皇以下、廷臣、武家、大和絵、水墨画派、雪舟派、狩野家と排列する。要するに『古画備考』の構成に認められる歴史観、価値観は同時代の狩野家に共有されるものであり、本書はその文脈において読み解かれるべきテキストであることが確認された。本画卷の調査時において研究代表者は、併せて⑩の畑報告が触れるフェノロサの手稿(ハーヴァード大学燕京図書館)も閲覧し、この手稿が『古画備考』原本に基づいている知見を得た。

②相澤正彦(分担巻:巻13~15名画一~三、巻21上名画九上、巻21下名画九下、巻22名画十、巻32巨勢家、巻33土佐家、巻48巻物画像雑類)

1. 史料ソースについて

朝岡が引用する水墨画関係の史料は、室町水墨画の逸伝画人については第一次史料に名がなく、江戸期画譜類である「本朝画史」「画工便覧」「名画拾遺」「弁玉集」の記述がほとんどを占めている。中でも「本朝画史」が圧倒的に引用され、博識の朝岡でさえ室町期の画家史料は「本朝画史」に頼らざるを得なかったとともに、我が国の画伝編纂史にとって、「本朝画史」の重要性について再確認させられる。関東水墨画については、京都で編纂された「本朝画史」の記述は少なく、逆に江戸周辺には祥啓画系作品などが一定の価値を有し朝岡も実見できたためか、メモ等による記述が圧倒的に多い。ただし北関東の雪村画系は作品も少なかったようで、「本朝画史」や「画工便覧」の引用がほとんどとなる。この傾向は江戸期的水墨画鑑賞の傾向を示し興味深い。

2. 『古画備考』のみに掲載された文書

美術史上、重要な意義を有するものとして、啓書記(祥啓)の項に収められた「貧楽齋」図の賛文が目される。京都五山の文人僧8人の詩文であるが、そこから読み取られる新たな事柄として①室町水墨画壇におけるアカデミズム様式を継承する数少ない画人としての祥啓の再評価、②京都、鎌倉、山口の画壇をめぐる同じ関東画人としての祥啓と宗淵との関係、③宗淵を通じ、雪舟の「破墨山水図」研究への新解釈、などが挙げられる(『関

東水墨画』[図書]④、「芸阿弥画本の幻影」「破墨山水図と宗淵」に発表)。古画備考のみが唯一掲出してくれた「貧楽齋」詩によって、室町中期の雪舟、祥啓らの代表的画人をめぐる画壇の動向がかなり鮮明になることはきわめて意義深い。

③大久保純一(分担巻:巻31浮世絵)

1. 巻31「浮世絵」の巻は、冒頭の総論的部分の記載内容は、「骨董集」「近世奇跡考」などの江戸末期の考証随筆類に拠っている。個々の浮世絵師に関する部分は、その内容および記述の多くが『浮世絵類考』にもとづいている。ただし嘉永年間という『古画備考』の起筆時期にもかかわらず、記載内容に具体性を増した『増補浮世絵類考』(天保15年成)などの追考、増補は参照されていない。このため、歌川国貞、同国芳、葛飾北斎の後半部分ら、江戸末期の絵師の記述内容に関しては、聞き書き、もしくは斎藤月岑編纂の『武江年表』(嘉永元年正編成立)が目につく。なお、割註で典拠を『浮世絵類考』とする記述に関しても、同書のどの系統にも記載の無い情報も一部に見いだされる。『浮世絵類考』そのものもその成立が煩雑を極めるものであるだけに、巻31「浮世絵」の典拠の考察には大きな困難がある。

2. 東京芸術大学所蔵の『古画備考』には原本に相当する「三十一 浮世絵」の巻はなく、翻刻作業には東京国立博物館所蔵の旧図書寮本を当てることになった。図書寮本は、『古画備考』活字本の随所に見られる浮世絵に対する知識不足に由来すると推測できる誤謬(たとえば、歌川豊春の項で、「浮世」とあるべきところを「ウキヨ畫」、「栄松齋長喜」の画名を「栄松齋長慶」とする類)はほとんど見いだせない。依拠資料となった『浮世絵類考』などの内容をほぼ正しく継承しているとみられるが、一方で、書写態度はいささか粗雑であり、『浮世絵類考』を一貫して『浮世画類考』と表記するおおらかさ(あるいは依拠した写本の書名を踏襲したものか)はともかく、活字本あるいは『浮世絵類考』と対校すると、大幅な記載の脱落や錯簡が随所に見いだされる。また、竹原春朝齋の項目で、列挙すべき内容を「…」で省略するなど、厳密さに欠ける書写姿勢は、資料的な有効性には疑問を抱かせる一因となるだろう。

④田島達也(分担巻:巻6武家3、巻28名画16、巻29、近世1巻30上近世2、巻30下天保、巻45宮殿筆者附)

1. 円山家と鶏頭図

古画備考研究会による合同調査の過程で見出された円山忠立の「鶏頭図」(現、武蔵野美術大学蔵)の研究。円山忠立は『古画備考』にも記されているように、古画の模写を多く行った。銭舜舉の模写は特に重要で、この絵の評判が、門跡寺院など

京都のハイクラスな受容層との関係を生んだと見られる。つまり応挙の作風形成だけでなく、キャリア形成にも大きな影響を与えたことになる。この調査で模写は応挙だけでなく4代目の応立まで代々写し継がれてきたことがわかった。そこで円山家の継承者にとって、舜拳写し鶏頭図は特別な意味を持つ図であることを論じた。シンポジウム「狩野派絵師の多彩な仕事」(2006. 10. 21、武蔵野美術大学、[その他]



ホームページ参照) で発表。

2. 『古画備考』における京都画界の把握と『画乗要略』

巻28、29、30上は、19世紀後期から19世紀前期の画人をカバーする。京都では、円山応挙登場以降、大きく発展した時代に当たる。江戸で情報を集めている朝岡がどのような資料によって京都の画界を把握していたかを探った。それにより、『画乗要略』への依存と、その偏りをそのまま受け継いでいることが明らかになった。

⑤並木誠士(分担巻: 巻4 柳営武家一、巻36 狩野譜中橋、巻37 狩野譜鍛冶橋、巻38 狩野譜木挽町、巻39 狩野譜諸同家)

狩野派を扱う巻は、いずれの巻も基本的には、目次、系図、伝記本文という構成をとり、系図により絵師の流れを記すという点では共通する。しかし、それぞれの巻のあいだに記述の方法、密度という点で大きな開きがある。

巻36では、狩野英信以下は、系図には記すが、目次、伝記ともに記載を欠く。貼紙による追記が多いのも、この巻の特徴である。また、刊本では「狩野門人譜」の狩野山楽の項目に記されている「摂津住吉郡神宮寺」の内容を記す貼紙が目次の前に添付されており、刊本作成にあって移動していることがわかる。ただし、この貼紙が本巻冒頭に貼られた理由については明らかにすることができない。

巻37では、狩野探船以下の画人については言及しない。一方で、巻38では、末尾に別紙を貼って晴川院の事蹟を記している。朝岡興禎自身の属する家流であるとはいえ、この時期における鍛冶橋狩野家との扱いの違いの大きさがわかる。巻38の系図中には興禎の名も記す。刊本と比較をすると、とくに常信の項で、誤記が多いことがわかる。巻39では、絵師別に立項することはなく、系図に注釈を加えるかたちで記述を進めている点で、他と異なる。

⑥黒田泰三・吉田恵理(分担巻: 巻11 釈門5、巻26 名画14、巻27 名画15)

1. 巻11・釈門5は宗派や画派にとらわれず近世

のいわゆる画僧を集めた部分であるが、4分の1は黄檗画僧(明人も含まれる)で、他に既述量の多い画僧としては、近年展覧会や論考がでつつあり注目されはじめた風外、白隠、古潤、月儂などがあげられる。朝岡の引用資料に鳥羽石隠『摺印補正』寛政12跋、享和2刊、はないが、本書が朝岡以前に黄檗画僧の略伝、落款印章を収集したおそらく唯一の版本であることを思えば、朝岡がここで黄檗画僧をとりあげた点は注目してよいかもしれない。しばしば指摘されるように狩野派画家と黄檗画僧との師弟関連から比較的取材しやすかったのかとも想像されるが、引用文献をみると、『李院扇譜』(天保9年、古藤養山、古筆了律・序、香雪山晋・識語。仁杉李院の所蔵目録)『展覧目録』など、他の巻ではあまり使用されていない、しかも、図版のない『目録』が目立つ。このあたりをどう考えるべきか、今後の課題としたい。

また、「図書寮印本」において『黄檗宗艦録』により黄檗歴代が相当数増補される。大槻幹郎氏によれば藤岡作太郎『近世絵画史』明治36年が「長崎と黄檗」の章をたて、黄檗と文人画を論じた最初だろうとされる。このことは、黄檗の美術の評価史、および『古画備考』の増補の問題として興味深い問題を提示していると思われる。なお増補された卓峰《三十三観音像》は、縮図がないが、現在東京国立博物館所蔵である可能性がある。

2. 巻26、27については、本研究の第一期報告書([その他]ホームページ参照)、および、口頭発表(「南画史研究からみた『古画備考』一名画14・15『増訂古画備考』26・27を端緒として」美術史学会東支部例会、2007年7月28日)において、第一期のメンバーであった星野鈴氏の詳細な報告があるため、ここでは割愛する。

⑦五十嵐公一(分担巻: 巻5 柳営・武家2、巻10 下釈門4、巻17 名画5 自明兆、巻40 狩野門人譜1、巻50 高麗朝鮮書画伝上、巻51 高麗朝鮮書画伝下)

1. 『古画備考』巻50、巻51の問題

[雑誌論文]②で論じた巻50、巻51の「高麗朝鮮書画伝」は、朝岡興禎原本が確認できないが、「図書寮印」本、刊本に含まれている。第一期報告書掲載「『檜城書画徴』における『古画備考』の位置」で論じたとおり([その他]ホームページ参照)、この「高麗朝鮮書画伝」は信頼できる朝鮮書画家伝として後世に大きな影響を与えてきた。そこで、この「高麗朝鮮書画伝」の成立過程について本文を丁寧に読み込むことで考察した。その結果、「高麗朝鮮書画伝」の作者として相応しいのは朝岡興禎であり、特に檜山坦齋の協力を得ていることが分かった。また、その成立には弘化二年頃の幕府の事情が関わっている可能性も見えてきた。従来、「高麗朝鮮書画伝」の成立過程は不明だったが、それをある程度明らかにできたのが収穫である。

2. 『古画備考』と『本朝画史』の問題

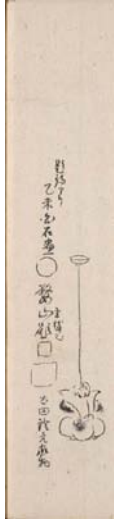
狩野永納の『本朝画史』は、日本最初の本格的な

画家伝である。この情報が『古画備考』にどのように活用されたのかを考察する準備ができた。『古画備考』の編集協力者の一人に檜山坦齋がいるが、この人物が鍵を握っているようだ。この問題については、今後発表する論文で論じる予定である。

⑧井田太郎 (分担巻：巻12 上詩人、巻12 下和歌・連俳・茶香・雑、巻44 英流)

1. 『古画備考』巻12上の言及作品の問題

巻12上所収の縮図のうち、新井白石の「皿回し図」(太田鑑元蔵、右図)は明記されていないが、先行する谷文晁の『本朝画纂』から写したもので



ある。文晁が『本朝画纂』を出した時点で太田鑑元蔵として紹介され、焼失したと書かれている。このように朝岡が実見した上での直摸ではない縮図が、断りなしに挿入されている事例もあることに注意を払う必要がある。また、漢詩人が登場する伝記的なレファレンスを主に引用し、『近世畸人伝』などエピソードを主体とするレファレンスも参照している。ただし、新井白石の墓碑銘「朝散大夫筑後守新井源公碑銘」は『鳩巢文集』を参照しつつも、本文傍注に「本ノミ」とあるので、実際の墓石も参照していると考えられる。墓石の見取り図も添える。

2. 英流関連の書画情報について

巻44には「朝清水記」という英一蝶の文章が収められるが、版本に所載のもの・ほかの写本所載のものと比較した結果、異同があり、草稿によるものかと考えられた。この件に関しては「一蝶の文事と絵事」(雑誌論文)①で発表予定である。また、巻12下・巻44所載の俳人岡田米仲の伝記は、米仲の縁者である観嵩月提供の情報で、ほかの資料にない実名や生業が記され、俳諧研究にも有益であることが確認された。

⑨成澤勝嗣 (分担巻：巻25 長崎、巻49 長崎画人伝)

1. 朝岡興禎屋敷の現在位置推定

活字本『古画備考』(吉川弘文館・1905)の片野青邱解題に「裏六番町二住ス」とあることから、児玉幸多監修『復元江戸情報地図』(朝日新聞社・1994)を検したところ、裏六番町南側中ほどに「朝岡三次郎」宅があった。現在の地名は番町学園通りに面し、日本テレビ四番ビル1号館の東隣り、住居表示でいえば千代田区四番町5-6と5-4の間にあたると推定される。

2. 朝岡興禎墓碑の調査

活字本『古画備考』解題(1905)に墓碑は新宿区舟町の全勝寺にあって「将ニ地ニ没セントス」という状態であった。また結城素明『東京美術家墓所考』(巧芸社・1931)は、興禎墓碑は「下高井戸龍泉寺墓地へ合併」と注記する。龍泉寺を訪れてみたがそれらしき墓碑は見当たらず、寺の方も

「朝岡という墓はない。移転時に破却した墓碑もあると聞いている」との話であった。今後さらに調査が必要。

⑩野口剛 (分担巻：巻7 釈門、巻23 名画11、巻24 名画12、巻41 狩野門人譜2、巻42 狩野門人譜3、巻43 狩野門人譜4)

1. 関古公子所持「昌運筆記」をめぐる問題

江戸時代の狩野派、ことにその門人の伝記には今日しばしば「昌運筆記」という文献が参照されるが、それらは『古画備考』における当該文献の断片的な引用に基づいている。昌運は宗家の安信の高弟で、安信没後は永叔主信の後見を勤めた人物。その名を冠する当該文献は、朝岡自身連なる狩野派において秘蔵された本とうけとられてきたかもしれないが、巻42狩野門人譜3を通読すると、それが、関古公子なる人物が所持していた本であることが判明する。『古画備考』では「昌運秘書」とも記される同本であるが、江戸前期から中期にかけて狩野派による画壇の統制が名目無実化される中でさまざまな情報流出、そのひとつの事例とみなされ、加えて、そうした情報が再び狩野派関係者の手元にもどり、その歴史観を肉付けするのに役立てられたという事実は興味深い。他方、「昌運筆記」は菅原洞斎『画師姓名冠字類鈔』にも「昌本」として多く引用されている。関古公子という古物趣味を強く匂わす名の人物が誰であるのかは目下不明であるが、朝岡周辺に形成されたかかる人的ネットワークの中で掘り出され、かつそこで活用された美術史文献である「昌運筆記」は、今日美術史研究の有り様をも、それを先駆けつつ象徴しているように思われる。

⑪畑靖紀 (分担巻：巻8 釈門2、巻9 釈門3、巻10 上釈門4、巻16 名画4、巻18 名画6、巻19 名画7、巻20 上名画8上、巻20 下名画8下)

1. 『古画備考』巻20上の原本の復元

原本所収の巻二十上は、朝岡興禎の自筆本ではなく新写本だが、失われた原本と最も近い内容をもつのは図書寮印本と考えられる。筆写の方法については巻二十上図書寮印本に六十箇所以上ある校訂が概ね正しく原本を反映すると想定される。内容も、巻二十上図書寮印本は「天開図画楼記」等に関して〈原本所収の巻二十上写本〉より記述が正確で、校訂を反映させた巻二十上図書寮印本のうち写本成立後の増訂箇所等を除く部分が、巻二十上原本の内容を最も良く伝えると考えられる。

2. 『古画備考』巻20上の図書寮印本の問題点

一方、巻二十上図書寮印本は内容に注意を要する箇所もある。一つは孫廷甫筆画法巻(京博蔵)と関係がある「雪舟画傳」の事項で、両者を比較すれば筆写内容が不完全で配列も大きく異なり、転写に混乱がある可能性もある。もう一つは「雪舟山水ノ賛」で、これは雪舟筆以參周省・了庵桂悟賛山水図(個人蔵)の賛文に相当する。注記の通り探幽縮図が出典であれば挿図が採録されてもよいが、図書寮印本に図はない。朝岡興禎の巻二

十上原本をみたと思われるフェノロサの手稿『印譜集』(仮題、ハーバード大学燕京図書館蔵)には、この山水図の縮図が描かれており、よって図書寮印本に原本の情報が伝わっていない可能性もある。以上の注意点はあるものの、原本が確認されない現時点で『古画備考』巻二十上図書寮印本は、雪舟研究において最も重要な位置を占めている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

(1) [雑誌論文] (計8件)

- ①井田太郎「一蝶の文事と絵事」『近世文学と隣接諸学』、無査読、竹林舎、2009年、243-272頁、
- ②五十嵐公一「江戸時代の朝鮮書画情報」『アジア遊学』120、無査読、勉誠出版、2009年、154-161頁
- ③大久保純一「名所絵の流通」『日本美術史の杜村重寧・星山晋也先生古希記念論文集』、無査読、竹林舎、2008年、445~458
- ④畑靖紀「鏡堂覚円賛白衣観音図」『国華』1347、有査読、2008年1月、20-23頁
- ⑤田島達也「美人画に見る京美人」、『美術フォーラム21』15、2007年、100-103頁
- ⑥畑靖紀「文明十八年の大内氏と雪舟」『雪舟等場一「雪舟への旅」展研究図録』、無査読、山口県立美術館、2006年11月、247-251頁
- ⑦野口剛「江戸中期・京都における絵画学習—雲鯨「学古巻」(画道秘録)の紹介をとおして—」『朱雀』(京都文化博物館研究紀要)18、無査読、2006年、21-42頁
- ⑧玉蟲敏子「狩野家絵師の仕事の多様性と、その今日的意味」、『御用絵師の仕事と紀伊狩野家』、無査読、武蔵野美術大学、2006年10月、4-7頁

(2) [学会発表] (計1件)

- ①玉蟲敏子「江戸後期狩野家の日本絵画観——朝岡興禎編著『古画備考』と狩野伊川院・晴川院筆「和漢流書画卷」(米国・ボストン美術館)をめぐる——」、有審査、美術史学会東支部例会、成城大学、2007年7月28日

(3) [図書] (計4件)

- ①並木誠士『絵画の変 日本美術の絢爛たる開花』、無査読、中央公論新社、2009年、総271頁
- ②玉蟲敏子『もっと知りたい酒井抱一』、無査読、東京美術、2008年、総80頁
- ③大久保純一『カラー版浮世絵』、無査読、岩波新書、2008年、総188頁
- ④相澤正彦、橋本真司『関東水墨画』、無査読、国書刊行会、2007年、総534頁

(4) [その他] 研究成果のうち、分量の多い①~

- ④は、ホームページ上に掲載するので併せて参照

されたい。

- ①改訂『古画備考』原本引用書画・資料一覧(未定稿)、2009年6月
- ②朝岡興禎編著『古画備考』各巻の解題、2009年6月
- ③シンポジウム「狩野家絵師の多様な仕事」(於武蔵野美術大学)パンフレット、発表要旨、2006年10月21日
- ④平成15年度—17年度科学研究費補助金基盤研究(B)「江戸時代における〈書画情報〉の総合的研究——『古画備考』を中心に——」(第一期)報告書、2005年6月

<http://www.musabi.ac.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

玉蟲 敏子 (Tamamushi Satoko)
武蔵野美術大学・造形学部・教授
研究者番号: 10339541

(2) 研究分担者

相澤 正彦 (Aizawa Masahiko)
成城大学・文芸学部・教授
研究者番号: 10159262
大久保 純一 (Okubo Junichi)
人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館・研究部・教授
研究者番号: 90176842
田島 達也 (Tajima Tatsuya)
京都市立芸術大学・美術学部・准教授
研究者番号: 40291992
並木 誠士 (Namiki Seishi)
京都工芸繊維大学・大学院工芸科学研究科・教授
研究者番号: 50211446
黒田 泰三 (Kuroda Taizo)
(財) 出光美術館・学芸課・課長
研究者番号: 60392883

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

五十嵐 公一 (Igarashi Koichi)
兵庫県立歴史博物館・学芸員
井田 太郎 (Ida Taro)
人間文化研究機構 国文学研究資料館・助教
成澤 勝嗣 (Narusawa Katsushi)
早稲田大学文学学術院・准教授
野口 剛 (Noguchi Takeshi)
(財) 根津美術館・学芸主任
畑 靖紀 (Hata Yasunori)
九州国立博物館・研究員
吉田 恵理 (Yoshida Eri)
静岡アートギャラリー・学芸員